

諸外国に見る音楽教育における「幼小接続」 ——フィンランドとハンガリーの事例から——

尾見 敦子*

Overseas Reports on How Systematically Musical Education Connects Between Kindergarten and Elementary Schools Finland and Hungary Cases

Atsuko OMI

要 旨

本稿は、フィンランドとハンガリーの事例を通して、我が国の音楽教育における「幼小接続」の問題に対する示唆を得ようとするを目的とする。フィンランドはすべての6歳児が受ける権利を有する「小学校入学前教育 Pre-primary」が置かれ、ハンガリーは幼稚園の最後の1年間（5歳児）が義務教育である。両国とも制度的に「幼小接続」が充実している国であると言える。そして、就学前から就学後に連続する子どもの発達保障を見据えた「単線型」の制度になっている。一方、我が国の就学前保育・教育政策はまさに現在、子育て支援の新制度への移行期にある。目下の政策課題である「子育て支援」の環境整備に力点が置かれ、就学前保育・教育制度の「複線型」が進行している。つまり「幼小接続」「保育・教育の内容」の再構築を見据えた教育政策はこれからである。

このような現状ゆえに、乳幼児の包括的な人格の発達に寄与する音楽教育の「幼小接続」のあり方を、諸外国の事例を調査をとおして探ることは急務であるとする。筆者は「音楽の協同性に着目した幼小接続の音楽活動の実証的研究」の一環として、2014年9月に両国を訪問し、調査研究を行った。その結果、フィンランドの事例は、音楽教師派遣制度が音楽教育の特質に照らして現実的な方策であることを示しており、ハンガリーの事例は、その詳細な分析をとおして、我が国の音楽教育の内容と指導法に具体的な示唆を与えるものであることが明らかになった。

キーワード：「幼小接続」、音楽教育、フィンランド、ハンガリー

*教授 音楽教育学

I. 問題意識

幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続を図ることが提言されて以来、現場の様々な取り組みが報告されるようになった¹⁾。幼小接続が目指すものとは、幼児期から児童期の子どもの「発達や学びの連続性」を保障することであり、幼児期後期の「学びの芽生えの時期から（児童期の）自覚的な学びの時期への円滑な移行」²⁾を実現するための体系的な教育プログラムの創出が急務となっている。では、この時代の要請に音楽教育はどう応えることができるだろうか。

諸外国の動向をみると、諸外国における就学前教育・保育制度改革の動向の一つに、幼小接続の取り組み（カリキュラムの見直しや教員養成制度の統合等）がある。乳幼児期教育・保育の社会的効果に関する研究成果や、幼児教育への公的投資の経済効果への期待から、先進各国において幼児教育 Early Childhood Education and Care (ECEC) に対する政策的重要性が高まっている³⁾。

音楽教育は乳幼児の心身の発達に対して積極的な役割を担うものとして、幼小の音楽教育の連続性と系統性を見据えた国家のカリキュラムの見直しがなされるべきだと考える。しかし、目を我が国の就学前保育・教育に移すと、今まさに子育て支援の新制度への移行期にあり、我が国の就学前保育・教育政策の力点は、「子育て支援」の環境整備に力点が置かれている状況であると言える。

フィンランドはすべての6歳児が受ける権利を有する「小学校入学前教育 Pre-primary」が置かれ、ハンガリーは幼稚園の最後の1年間（5歳児）が義務教育である。両国とも、制度的に「幼小接続」が充実していると言える。そして、就学前から就学後に連続する子どもの発達保障を見据え、保育から教育へと段階的に移行するシンプルな「単線型」の制度になっている。一方、我が国は子育て支援制度の視点から、就学前保育・教育制度の縦割りの「複線型」が進められている。

このような現状であるからこそ、「幼小接続」期の音楽教育のカリキュラム全体における位置づけや、教育内容・方法、教員養成のシステムについて諸外国の動向を知ることが求められるのではないかと考える。このような問題意識のもとに、筆者は共同研究者⁴⁾とともに、2014年9月に両国を訪問し、幼稚園、小学校における音楽指導の参観、専門家による講義、指導者や教員養成大学の教員へのインタビュー等の調査研究を行った。本稿に調査研究の概要を報告するとともに、ハンガリーで参観した、幼小接続期を意識した5歳児への音楽指導の詳細な報告を行う。我が国の「幼小接続」の音楽教育の内容と指導法に具体的な示唆を与えると考えるからである。報告に先立って、両国の教育制度や「幼小接続」に関わる国家のカリキュ

ラムの概要を述べる。

Ⅱ. フィンランドとハンガリーにおける「幼小接続」と音楽教育の位置づけ —学校教育制度と国家のカリキュラムの視点から—

フィンランドには小学校の準備教育として6歳児（6－7歳）ための1年間の就学前教育（pre-primary education, フィンランド語で esikoulu エシコウル）が制度的として存在する（0－5歳は初期幼児教育・保育 Early Childhood Education and Care, ECECである）。すべての6歳児が就学前教育を受ける権利があり、これは無料で自由である。自治体に就学前教育を提供する義務がある。6歳児のほとんどが就学前教育を受けている。遊びながら学ぶのが大前提で、学習の基礎となる知識や能力を、年齢と発達に応じて、身につける⁵⁾。「ナショナル・コア・カリキュラム（“National Core Curriculum for Pre-primary Education”）（2010年）⁶⁾によれば、就学前教育の「中核となる教育内容」は、言語と相互作用、数学、倫理と宗教、環境と自然科学、健康、身体と運動発達、芸術と文化、の7つから成り、「音楽や他の芸術経験は、子どもの感情的、実践的、認知的発達の重要な部分を形成している」と位置づけられている。

ハンガリーは0－2歳が乳児保育所、3－5歳が幼稚園である。就学前1年間は小学校への就学に備え、最低1日4時間、幼稚園への通園義務がある。つまり、5歳から義務教育である。（なお、政府は義務教育開始を3歳にすることを計画しているが、それに見合う幼稚園数が足りず、実現は困難とされる⁷⁾。）

「幼稚園教育の国家の基礎プログラム（Az Óvodai Nevelés Országos Alapprogramja）」（2012年）⁸⁾によれば、幼稚園教育の活動形態は、遊び、詩・お話、歌・音楽・歌遊び・子どもの踊り、描画・造形・手仕事、動き、外の世界を活動的に知る（環境認識）、仕事の特徴を持つ活動、活動を通して実現される学習、から成っている。そして、筆頭に挙げられた「遊び」は他の活動領域とは次元を異にする、すべての領域の上位に立つものとされる。つまり、幼稚園の音楽教育の教育原則は「遊び」である。音楽教育は「歌、音楽、歌のあそび、子どものダンス」を包括し、「詩、物語」「描画・造形・手仕事」「運動」「環境認識」とともに「幼稚園生活の活動の構造」の一翼を成すものとして明確に位置づけられている。そしてその記述は次のように非常に具体的である。

音楽活動を通して、メロディやリズム、動きの美しさ、一緒に歌うことの喜びを子どもが発見する。民謡を歌うことや聴くこと、子どものダンス、民族舞踊、民族的な遊び、伝統の認識と伝承を援助する。幼稚園における歌・音楽教育の課題遂行の成果が、音楽的母

語形成の基礎となり促進させる。

「幼稚園教育の課題」(第三章)として、「健康的な生活様式の形成」と「情緒的、道徳的、集団的教育」「母語、知的発達と教育の実現」が挙げられているが、これに呼応するように、終章(VI章「幼児期の終わりの発育の特徴」)には「就学のための成熟度」が以下のように具体的に列挙されている(一部を引用する)。

「小学校入学までに達している、身体的、精神的、社会的成熟度」(一部引用)

- 学習の基礎となる意図の注目が現れ、注目の内容・範囲は段階的に増幅し、注目の分散と移行が容易になってくる。
- 感覚的思考や表象的思考と並んで、初歩的な抽象的思考も形成されつつある。
- 意図的な記憶と想起ができるようになり、記憶の保存期間が延びる。認識と並び、想起の役割が徐々に大きくなる。

「就学のための成熟度」の記載内容からわかることは、幼稚園教育のサイドから小学校に向かう「幼小接続」が明確に意識されていること、そして、「成熟度」の観点から「幼稚園生活の活動」を構成することが求められている、ということである。

音楽指導もまた、これらの「就学のための成熟度」の達成に関わっている。今回参観した5歳児の音楽指導が、「注目の分散と移行」「初歩的な抽象的思考」「記憶の保存」「認識と並び、想起の役割の増加」という「就学のための成熟度」の達成に寄与していることは、分析を通して明らかである(後述、第四章)。ひるがえって、日本の「幼稚園教育要領」を見ると、「就学のための成熟度」に相当する客観的な指標は見当たらない。音楽教育は「表現」領域に位置づけられているが、その「ねらい」は「感じたことや考えたことを自分なりに表現して楽しむ」ことであり、その「内容」は、「音楽に親しみ、歌を歌ったり、簡単なリズム楽器を使ったりなどする楽しさを味わう」(傍点引用者)ことである。「幼小接続」を進める一歩は、「小学校入学までに達している、身体的、精神的、社会的成熟度」、という発達の客観的指標を国家のコア・カリキュラムに示すことではないだろうか。

Ⅲ. 「幼小接続」の視点から見たフィンランドとハンガリーの音楽教育

—今回の調査研究の概要—

I章で述べた問題意識のもとに、筆者らは、2014年9月14日～18日にハンガリー(尾見、小川、永岡)、9月21日～23日にフィンランド(尾見、永岡)を訪れ、情報収集を行った。

諸外国に見る音楽教育における「幼小接続」

両国の幼稚園・小学校、教員養成大学、音楽大学を訪ね、「幼小接続」の視点からそれぞれの学校段階、および教員養成の音楽指導・音楽授業を参観した。参観のあと、指導者や園長・校長等を交えて懇談を行った（表1）。

ハンガリーはコダーイ・ゾルターンの音楽教育理念に基づく系統的な音楽教育が行われている

表1 調査研究の訪問先・参観内容・懇談

月 日	曜日	No.	訪問先（上段）および参観・懇談の内容（下段）
9月14日	月	①	Cikador Általános Iskola（ツイカドル小学校） 8年生、2年生、4年生の音楽授業参観，教師と懇談，校長と懇談
9月15日	火	②	Városi Óvoda（町立幼稚園） 幼児の音楽指導を参観，園長・主任・クラス担任と懇談
		③	II. Géza Gimnázium（ゲーザ・ギムナジウム） 12年生の音楽授業を参観，校長と懇談
9月16日	水	④	Marczibányi téri Kodály Zoltán Általános Iskola（ブダペスト） （マルツイバーニ・コダーイ・ゾルターン音楽小学校） 4年生、8年生、2年生の音楽授業を参観，校長と懇談
9月17日	木	⑤	Eötvös Lóránd Tudományegyetem gyakorló Általános Iskola（ブダペスト） （エトヴェシュ・ローランド大学 教員養成課程附属実習小学校） 1年生、2年生の音楽授業を参観，教師と懇談
		⑥	Eötvös Lóránd Tudományegyetem Tanító és Óvó-képző Főiskola （エトヴェシュ・ローランド大学 小学校・幼稚園教員養成課程） 2年次の音楽授業を参観，および同教員養成課程の音楽担当教員との懇談
9月18日	金	⑦	Cseperedő Óvoda（チェペレドゥー幼稚園）（ブダペスト） 3-5歳児の音楽指導を参観，園長，音楽指導者との懇談
		⑧	Dietrich Helga（ELTE 教員養成大学 幼稚園教員養成課程，元音楽担当教員） 就学前の音楽教育についての特別講義
9月21日	月	⑨	Nuottakunnan päiväkoti（ヌオッタクンタ保育所&プレ・スクール）（エスポー） 3歳児，4歳児・5歳児の音楽指導を参観，担当教員と懇談
		⑩	② Viikin normaalikoulun ala-aste（教員養成課程附属ヴィーッキ小学校）（ヘルシンキ） 実習生による4年生の音楽授業を参観，音楽担当教員と懇談
9月22日	火	⑪	Itä-Helsingin musiikkikoulu/Pololahden IHMU-piste（ヘルシンキ） （東ヘルシンキ器楽学校併設小学校） 3年生の音楽授業，1・2・4年生の器楽レッスンを参観，校長および音楽担当教員と懇談
		⑫	Musiikkileikkikoulu（幼児の音楽教室）（ヘルシンキ） 3歳児，4歳児・5歳児の音楽指導を参観，担当教師と懇談
9月23日	水	⑬	Sibelius Academy University of the Fine Arts（シベリウス音楽アカデミー）（ヘルシンキ） ポピュラー音楽，フィンランド民俗音楽，音楽と動き，幼児の音楽，の各授業を参観，各授業担当者と懇談，「幼児の音楽」の授業において日本のわらべうた遊びを紹介
		⑭	Heidi Westerlund（シベリウス音楽アカデミー教授） ナショナルカリキュラム，教員養成制度等について懇談

る。小学校以降の音楽の知識や概念教授は、幼稚園での豊富な歌遊び（伝承のわらべうた）の体験を土台にしている。ハンガリーでは音楽教育の「内容」が、「幼小接続」されている。首都から離れた地方の町の公立幼稚園では、2つのクラスの、クラス担任の歌や歌遊びの一コマを参観した(②)。ハンガリーは、幼稚園の異年齢混合クラス編成が一般的であり、訪問園もそうであった。同じ町の小学校2年生が、幼稚園や1年生で習った遊び歌を教材に、「均一の拍」「モチーフ（4拍のまとまり）」の概念を主体的に学んでいた(①)。

首都ブダペストでは、公立幼稚園で週1回行われている、5歳児を中心とした音楽特別指導（「音楽幼稚園（zene ovi）」）を参観した(⑦)。同じく首都にある教員養成大学附属実習小学校では、1年生（学級担任）と2年生（音楽専科教員）の授業を参観した(⑤)。新学期が始まってまもない1年生の授業では、幼稚園で習った伝承の歌遊びを嬉々として全員で遊び（8曲）、1拍を意識させる学習もあった（1曲）。授業はダンスや体育のためのオープンスペースの教室で行われた。1年生の教室の環境構成はまさに「幼小接続」の配慮を感じさせるものであった。音楽専科教員による2年生の授業は、密度と集中度が高く、歌遊びをもとに緩急自在の鮮やかな授業展開であった。

ハンガリーには普通課程であるが音楽の授業数が多い音楽小学校がある。首都、ブダペストの音楽小学校(④)では、音楽的力量のある教師が創意を凝らし、圧倒的に音楽的レベルが高く楽しい授業を展開し、児童が嬉々としていた。校長に拠れば、音楽小学校の児童は知的な学力も高いという（かつて心理学者によってその実証的研究が行われたという）。これは音楽が「幼小接続」の鍵になりうることを示唆していると言えよう。

今回の一連の授業参観を通して、音楽教育の成果は授業時間数と音楽教師の力量に拠ること、年齢が小さいほど音楽教育の効果が高いことは明らかである。また、幼稚園・小学校教員養成の音楽授業、教育実習の時間数やシステムは日本と比べてはるかに充実している(⑥)。この重要なテーマについては機会を改めることとしたい。

フィンランドでは、6歳児の就学前教育における音楽指導を参観する機会は得られなかったが、保育所（nursery、フィンランド語でpäiväkoti）における音楽活動、および、課外の幼児の音楽教室（Early Years Music、フィンランド語でMusikkileikkikoulu、ムスカリ muskari と呼ばれる）を参観することができた。音楽学校に所属する、幼児の音楽指導を専門とする音楽教師によるものである。

我々が訪問したエスポー市の保育園(⑨)では、月曜日にエスポー音楽学校（Espoo Music Institute、フィンランド語でEspoon musiikkiopisto、EMO）に所属する音楽教師がやって来て、午前中に3・4・5歳児、午後6歳児の音楽指導を行っている（エシコウルは多くは保育園の

中で行われている)。エスポー市では自治体の予算で、EMOの音楽教師を15の保育園に派遣している。つまり、保育園および6歳児の就学前教育の音楽教育は音楽教師によって行われている。参観したのは、9時から3歳児が40分、4歳児が50分、5歳児が60分の音楽指導であった。かなり長時間の音楽活動であるが、子どもたちは飽きることなく集中して参加していた。子どもたちはクラス担任と一緒にホールにやってくる。クラス担任は特定の子どもを援助する以外は見学している。各年齢グループの音楽活動の構成はほぼ同じで、年齢に応じた変化をつけている。教師は声、カンテレ（5弦のフィンランドの代表的な民族楽器）、身体表現、楽器（1音木琴）、ピアノ、CD教材を適宜使い分け、子どもたちに対して緩急自在に、アクティブに働きかけ、子どもたちの興味を惹き続けるという、専門性の高い音楽活動を展開していた。

同じく、エスポー音楽学校に所属する別の音楽教師による幼児の音楽教室（⑫）（ムスカリ musukari）も参観した。子どもたちは父母に連れられてくるが、父母は音楽指導に同席しない。ここでも音楽活動は長時間にわたり、3歳児（6名）が45分、5歳児（9名）が60分、6歳児（5名）が60分であった。4歳児以上にカンテレの演奏が取り入れられていた。声によるコミュニケーション、教師が電子ピアノで働きかける音楽と動き、歌遊び、低音の大きな1音木琴（ドとソ）のリズム遊び、主音と属音の直感的理解、等の音楽活動が次々展開されていく。一連の音楽活動には一定の順序で構成され、年齢グループを通じて共通する流れがあった。

小学校は異なるタイプを2校訪問した。ヴィーッキ実習小学校（⑩）では音楽非専攻の、現職教員でもある教育実習生による4年生の授業を参観した。実習小学校とは対照的な性格を持つ、東ヘルシンキ器楽学校併設小学校（⑪）は、小学校と器楽学校を兼ね合わせた学校で、ハンガリーの音楽小学校と同様、普通課程の小学校である。児童は1年次から、校内で、選択した芸術楽器を専門の教師から学ぶ。児童は少数数のグループレッスンと、クラス単位の「音楽」の授業を学校で受ける（午前中）。個人レッスンは課外（午後）に置かれている。今回の訪問で、1年生から8年生まで、ヴァイオリン、アコーディオン、カンテレのレッスンを少しずつ参観する機会を得て、年齢が小さければ小さいほど、音楽専門の教師から与えられる音楽的影響は明らかに大きいと感じられた。音楽教育は「幼小の接続期」に重点的に、音楽の専門教師によってなされるべきなのではないか。この学校の教育課程に組み込まれた楽器のレッスンが個人レッスンではなくアンサンブルであることも小学校教育において意義があると思われる。

シベリウス音楽アカデミーでは、器楽（ピアノやヴァイオリンなど）や声楽、作曲など、それぞれの専攻学生が、「ポピュラー音楽」や、就学前の音楽教育に関わる選択科目である、「音楽と動き」「幼児と音楽」の授業を受講していた（⑬）。中等教育の教員免許を取得する学生たちが、即興的音楽表現やフィンランドや近隣諸国の歌遊びやフォークダンスに嬉々とする姿を

とおして、音楽の協同性と遊戯性を再発見する音楽体験は、どの年齢段階の音楽教師の養成においても必須ではないかという思いを強くした。

Ⅳ. 「幼小接続」の音楽教育の具体的事例 —ディートリヒ・ヘルガの音楽教育の理念と実践—

Ⅱ章で述べたように、ハンガリーでは、幼稚園の最終年度（5歳児）は義務教育である。「幼稚園教育の国家の基礎プログラム」に明示されているように、3年間の幼稚園教育をとおして「就学のための成熟度」に達することが求められる。（達しなければ本人の利益のために就学を延期するということが浸透している。）このように、「幼小接続」は実質性を持った、連続した発達保障を意味している。

フィンランドでは、保育園と小学校を「接続」するものとして置かれた1年間の就学前教育（エシコウル、6歳児）において、「学習の基礎となる知識や能力を年齢と発達に応じて身につける」ことが求められる。このように、「幼小接続」は実質性を持った、連続した発達保障を意味している。

では、音楽教育は幼児期から児童期の連続した発達保障にどのように寄与するのだろうか。ディートリヒ・ヘルガ Dietrich Helga（ハンガリーは日本と同じ姓・名の順である。以下、ヘルガと記す）は、就学前の音楽教育についての特別講義（表1, ⑧）において、「音楽が子どもの人格に及ぼす教育力」について、太陽の模式図（図1）で示した。この図は、音楽経験が音楽的能力の発達と人格の諸側面の発達を促進することを表わしている。ヘルガは音楽がもっている教育力を、「歌／音楽（歌唱や器楽の音楽経験）は太陽光線のように子どもの人格の諸側面に降り注ぐ」と表現した。音楽は「1. 五感を働かせる観察力」, 「2. 感覚的な経験と新しい学び」, 「3. 感情生活と思考能力」, 「4. 社会性・忍耐力・社会のルールを受容力」, 「5. 調整された動き」, 「6. 美的な感受性と受容的で創造的な活動」, 「7. 環境に適切に関わること」を発達させる。音楽的能力に固有の発達領域は「音楽を聴くこと」, 「リズム感覚」, 「音程の正しい歌唱」, 「音楽の創造欲求」, 「音楽鑑賞」である。幼児の音楽教育はこれらの音楽的能力を発達させ、音楽の教育力が人格の諸側面にまんべんなくゆきわたるように行うのである。

このように、ハンガリーでは、幼稚園生活の音楽領域で、就学までに達するべき「身体的、精神的、社会的成熟度」を念頭に置いた教育が行われることがめざされる。その具体的事例を見ていきたい。ブダペストの幼稚園における「音楽幼稚園」の指導事例（表1, ⑦）を以下に取り上げる。

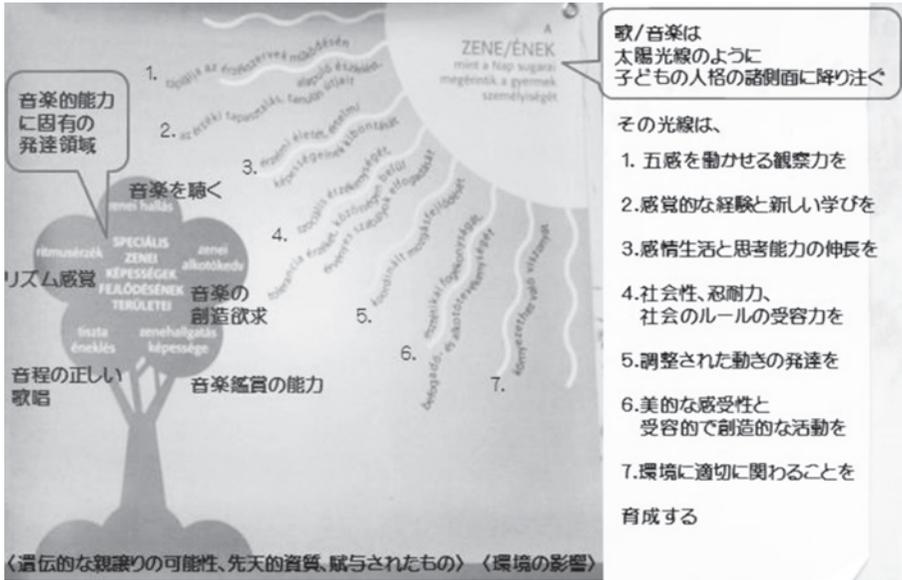


図1 音楽が子どもの人格に及ぼす教育力（ディートリヒ・ヘルガ）（訳出：尾見敦子）

「音楽幼稚園」の指導者はディートリヒ・ヘルガ Dietrich Helga である。彼女は、コダーイ・ゾルターンの理念に基づき、この国の幼児の音楽教育の礎を築いたフォライ・カタリンの後継者である。ELTE（エトヴェシュ・ローランド大学）小学校・幼稚園教員養成学部で教鞭をとる傍ら（すでに引退）、アメリカ、イギリスなど海外から招聘され、講演や指導を行ってきた。2013年、8月にハンガリーのケチケメートで開催されたコダーイ国際シンポジウムでは30分間の幼児の音楽指導のデモンストレーションを行った⁹⁾。

ヘルガの「音楽幼稚園」は、午前中の保育時間内に週1回、40分行われ、親の意思で参加を希望する4～5歳児（ほとんどが5歳児）が約20名参加している。「音楽幼稚園」は9月末に始まり、翌年6月に終了する。今回ヘルガは、特別な計らいで、第1回を1週間早めて実施した。そのために直前に2回、子どもたちと音楽遊びを行った。

本事例は8つの活動から成っている。これは通常スタイルではなく、ヘルガの言によれば、2013年9月からの1年間の「復習」である。ふだんは人形の使用を精選し、多用しないが、今回は第1回なので、幼児のモチベーションを喚起し、音楽的認知を助けるためにさまざまな人形を用いた。活動のタイトルは筆者がつけた。ねらいは筆者の分析に基づく。分節化された8つの活動を、表2-1～8にまとめた¹⁰⁾。

表2-1 《活動1》挨拶の言葉でエコー（2分5秒）（ねらい：拍の保持、4拍のまとまり、拍とリズムの概念、強弱の相対的な違い）

《活動の様子》	《活動の流れ》	《備考》
<p>1.1 </p> <p>(拍に合わせてひざを打つ)</p> <p>1.2 </p> <p>(「ウサギの耳」で小さく打つ)</p> <p>1.3 </p> <p>(手の平を打ち合わせて大きく打つ)</p>	<p>1.1 【拍を打つ】 T 【注1】：立って、丸くなりましょう（*1）。これから唱えたり、歌ったりします。最初は唱えますよ。よく聴いて、エコーで返してね。 T : <i>Mín-dén-kí-nek jó reggelt!</i> (みなさん、おはよう) (*2) 【注2】 C : <i>Mín-dén-kí-nek jó reggelt!</i> (みなさん、おはよう) (*3) T : <i>Fü-ük-nak és lá-nyok-nak!</i> (女の子たち、女の子たち) (*4) T : <i>Mín-dén ma-sol-yóg-nak.</i> (みんな、笑っています) T : <i>Jó reggelt ven-dé-gek!</i> (おはようお客様たち)</p> <p>1.2 【言葉のリズムを打つ】 T : では、両手で、別のものを示しますよ。 T : <i>Szer-vusz-tok lá-nyok.</i> (女の子たち、こんにちは) (*5) T : 何か魔法が起こったの？ C : 「ウサギの耳」になった。 T : ずっと「拍」を打っていたかしら？ C : 違う！「リズム」だよ！ T : もう1回ね、難しいわよ。 <i>Fü-ük, lá-nyok, szer-vusz-tok!</i> (女の子たち、女の子たち、こんにちは) [C : エコー]</p> <p>1.3 【強弱を比較する】 T : 注意して聴いてね。 Jó reggelt, ki-vá-mok! (おはようございます) (*6) [C : エコー] C : 小さくなった！ T : 小さくなったのね。 T : <i>Szer-vusz-tok, gye-rek-kek!</i> (こんにちは、子どもたち) (*7) [C : エコー] T : 今は大きくなったわね (*8)</p>	<p>【注1】 Tは教師、Cは子ども、と略記。 【注2】 歌詞の表記は以下の通りとする。 ①1語を音節に分けてハイフンでつなぐ。②「拍」に一致する音節の母音にアンダーラインを引く。 (*1) Cが壁に寄りかかからないで丸く円になり、互いに顔が見えるよう、言葉で促し、隊形を整える。リコーダーを脇にはさみ、子どもたちの間に入る。 (*2) 両手でひざを打ちながら、唱える。 (*3) CはTのテンポを保持して、間を聞けずに答える。Tの「拍のひざ打ち」は一貫して行われる（拍の保持を促す）。 (*4) 以下、Cはエコーで「拍のひざ打ち」を伴って答える。Tが提示するとき、Cは「拍のひざ打ち」をしないで聴く。 (*5) Tは以下、「言葉のリズム」を右手の「2本指」(注、「ウサギの耳」と呼ぶ)で左手の平を打って提示する。 (*6) 右手の「2本指」で左手の平を小さく打つ。 (*7) 「手の平」を打ち合わせて大きい音で打つ。 (*8) 音量の「(より) 小さく」「(より) 大きく」の概念を復唱、確認したのち、間をおかずに《活動2》に移る。</p>

表 2-2 《活動 2》 伝承の遊び歌「クルミが揺れる Erre csörög a dió」を歌う (2分) [ねらい：4 拍の保持、後出の学習の準備 (旋律唱)]

《活動の様子》	《活動の流れ》	《備考》
<p>2.1  (男児を指名する)</p>	<p>2.1 【開始部分を聴いて何の歌か当てる】 T：さあ、私のリコーダーが歌いますよ。何の歌かわかるかな？ C：(3行目の初めで、男児がさつと手を挙げる) (*1) 【注 3】 T：あなたはもうわかったの! (*2) C：リスが口笛を吹いている… (*3)</p> <p>2.2 【拍を打ちながら、Tと一緒に歌詞で歌う】 T：では、歌いましょう。拍も示しましょう。(*4)</p> <p>Er-re cső-rög a di-ó. (こっちでは胡桃がざわわ揺れる) Ai-ra meg a mő-gyo-ró. (あつちではへーゼルナッツが揺れる) Mő-gyo-ró bok-ron, di-ó-fán. (それぞれの木の上で) Mő-kus fűi-tyős lomb al-ján. (葉を揺らす風は口笛のよう、揺れる葉の下にリスが一匹)</p>	<p>【この歌の音楽的特徴】 歌詞：4 行詩 (1 行が 4 拍)、脚韻 (2 行ずつ) 音階 (構成音)：ミ-レ-ド (ド=終始音) 音域：F5-A5 (3 度) 旋律の動き：順次進行 形式：反復 (1 行目と 2 行目)</p> <p>【注 3】 わかつたら黙って「ウサギの耳」(チヨキの形) で手を挙げる、という約束である。 【注 4】 ドレミは階名、下線は 1 拍を表す。</p>
<p>2.2  (男児を指名する)</p> <p>2.3  (「拍のひざ打ち」をして歌う)</p>	<p>2.3 【4 拍ずつ、リコーダーを聴いて C だけでエコーで歌う】 T：リコーダーがこう言っているの。「最後までではなくて、少しずつ歌うわよ。いつも少しだけ歌うから、びったりそのとおりに歌ってね。とても難しいの。リコーダーから始まりますよ。」 C：<u>E-re cső-rög a di-ó.</u> (1 行目を歌う) (*6) T：<u>ミミレレドドレ</u> (*7) C：<u>Ai-ra meg a mő-gyo-ró.</u> (2 行目を歌う) T：<u>ミミレレミミレ</u> C：<u>Mő-gyo-ró bok-ron, di-ó-fán.</u> (3 行目を歌う) T：<u>ミミレレドドド</u> C：<u>Mő-kus fűi-tyős lomb al-ján.</u> (4 行目を歌う) T：よくできました (褒める)。</p>	<p>(*1) さつと手を挙げた男児に続いて、多くの子たちが手を挙げる。 (*2) 最初に手を挙げた男児を指名する。 (*3) 次の 4 行目の歌詞をつぶやく。 (*4) T が「拍のひざ打ち」を始め、4 拍の予備拍のあと、T の歌の開始と同時に C が「拍のひざ打ち」をしながら歌い出す (言語的指示なしに歌の開始が揃う)。1 回、通して歌う。 (*5) T はテンポを落として旋律を吹く。C は楽器が奏でる旋律を聴いてその歌詞を歌う。C は「拍のひざ打ち」をせず、内的に拍を保持して、4 拍のままりを感じて歌詞で歌う。 (*6) T は C の 1 行目 (4 拍分) の歌唱が終わる前に、両手で自分の胸を「拍打ち」して次の 4 拍は教師が吹くことに注意させるが、何人かが 2 行目も続けて歌ってしまう。T は間違いを正し、「4 拍のエコー」を意識化させる。</p>
<p>2.3  (4 拍ずつ、リコーダーを聴いて歌う)</p>		

表2-3 《活動3》伝承の唱歌「ジュリエ Gyékény Gyákány」を唱える (3分54秒) (ねらい：拍とリズムの識別、楽器で打つ)

《活動の様子》	《活動の流れ》	《備考》
<p>3.1  (開始部分を聴いて、何の歌かが分かった子どもが拳手する)</p> <p>3.3  (女児bが、唱えながらフィンガーシンバルで拍打ちをする)</p> <p>3.4  (人指し指をクララバスに見立て指でリズム打ちしながら唱える)</p>	<p>3.1 【開始部分を聴いて何の歌か当てる】 T：これは何かな？言葉は言いません。歌でなく唱え歌よ（フィンガーシンバルで拍を打ちながら、唱え歌をハミング）(*1) T：どう始まるでしょう？（始まりの言葉を問う）(*2)</p> <p>3.2 【拍打ち（ひざ打ち）しながら唱える（全員）】 T：「拍のひざ打ち」をしながら（皆で）唱えましょう。（*3）</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>Gyékény Gyákány. (※ナンセンス・ワード) Jón a Gyuri bátyám. (ジュリエちゃんか来るよ) Di-ót visz a há-tám. (胡桃を背負って) Hogy-ha ne-héz leteszi. (重いなら置いて) Hogy-ha éh-es, meg-eszi. (はらべこなら 食べる)</p> </div> <p>3.3 【拍打ち（楽器）しながら唱える（一人で）】 T：誰が一人で（楽器で拍打ちが）できますか？（*4） T：（女児bに楽器を渡し）上手に打ち合せて美しく鳴らしてね。 C：（女児bが唱えながら楽器で拍打ちするのを聴く。） 3.4 【指でリズム打ちしながら唱える（全員）】 T：（クララバスを手に持ち）これも唱え言葉よ。よく聴いて。（*5） T：これも Gyékény Gyákány. なぜもう一度、やったのかしら。 C：（男児a）さっきのは「拍」で、今は…（他児ら）「リズム」！ T：（クララバスを女児cに渡したあと）私たちはこうやって（*6）リズムを示しましょう。（C：女児cのクラバスの指で合わせて唱える） 3.5 【内唱でリズム打ちをする（全員）】 T：声に出さずに心の中で唱えてリズムを打ちましょう。（*7） 3.6 【楽器（一人）で、拍（フィンガーシンバル）とリズム（クララバス）を合わせる（他児は聴く）】（*8）</p>	<p>【この唱歌の音楽的特徴】 歌詞：4行詩（1行が4拍、脚韻（各行））</p> <p>(*1) 半数くらいの手が拳がる。Tが女児aを指名すると1行目の3、4拍目の言葉（Gyékány）を答える。 (*2) 指名された男児aが1行目を答える。 (*3) 全員が嬉々と拍打ちしながら唱える。 (*4) 数名が拳手する。 (*5) 2倍くらいテンポを落として、クラバスでリズムを打つ。数名が拳手する。女児aを指名すると「Gyékény Gyákány（冒頭の2語）」と答える。 (*6) 両手の人指し指をクララバスに見立て、打ち合わせるしぐさを示す。 (*7) 両手を合わせてリズムを打って示して促す。Cは声を出さずに口を大きく動かして心の中で唱えている。 (*8) Tはまず女児bにフィンガーシンバルの拍打ちを練習させ、次にそれに重ねて女児cにクララバスのリズム打ちを試みさせる。二人は拍を保って演奏し、他児は唇を動かして唱和している。上手にできたことを褒め、間をおかずに《活動4》へ、ハミングで歌い始める。</p>

表 2-4 《活動 4》 伝承の唱え歌「クルミの木が枯れた」を遊ぶ (5分40秒) [遊び]

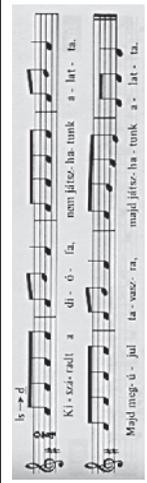
《活動の様子》	《活動の流れ》	《備考》
<p>4.4  (連なって歩く)</p>	<p>4.1 【開始部分を聴いて何の歌か当てる】 T: (ハミングで1回歌う) (*1) 4.2 【拍打ち (こぶし) しながら歌う (全員)】 T: 立って、クルミを割りますよ。(*2) C: (クルミ割りのしぐさをしながら通して1回歌う。)</p> <p>Ki-szá-rádt a di-ó-fa (クルミの木が枯れた) Nem jász-ha-tunk alát-a (その下で遊べない) Majd meg-újítl ta-vasz-ra (春になったら復活する) Majd jász-ha-tunk alát-a (またその下で遊べる)</p>	<p></p> <p>(出典：フオライ, p.151) 歌詞：4行詩 (1行が4拍)、脚韻 (各行) 音階 (構成音)：ラーン、ソーフアーミーレード (ド = 終始音) 音域：D5-B5 (6度) 旋律の動き：順次進行 形式：反復 (1・2・3行目が同型)</p>
<p>4.5  (クルミの木の周りを歩く)</p>	<p>4.3 【4拍ずつ、拍打ちせずに、Cだけでエコーで歌う】 T: 私が始め、みんなはエコーで返します。少しずつよ。 T: Ki-szá-rádt a di-ó-fa (クルミの木が枯れた) C: Ki-szá-rádt a di-ó-fa (クルミの木が枯れた) (*3)</p>	<p>(*1) 数名が手を挙げ、指名された女兒 d が歌詞の冒頭を答える。 (*2) しぐさ遊びでこぶしをトントン打ち合せ、「拍打ち」をする。 (*3) 歌声の音量が下がる。Cは互いに聴き合い、拍を保って歌っている。 (*4) Cは広がって手を繋ぎ、歩く方向に体を向ける。 (*5) 円の中の4人は庭のクルミの木。手を繋ぐ。歌の後半は歌の前半はクルミの木の周りを回る。歌の後半は木の役は相手を選んで二人組で回り、選ばれた子の新しい木になる。Tは遊びのルールを確認したのち、遊びを開始する。</p>
<p>4.5  (木の役は相手を選んで二人組で回る)</p>	<p>4.4 【連なって歩く】 T: (両隣の子ともと手を繋ぎ) ここは大きな庭ですよ。いつものように自分でしつかり歩いて、方向に気をつけて。(*4) T: (歌いながら連なって歩き、歌を3回繰り返して、円に戻る。)</p> <p>4.5 【遊ぶ】 T: いつものように背の高い子を選ぶわね。庭の開いて閉じて。円になって歩きます。歌の終わりで急いで相手を選んでね。(*5) T: (1回目) 自分たちで歌を始められるわね。 T: (4回目) 自分をそろえて歌い始める) C: Ki-szá-rádt a di-ó-fa … (声をそろえて歌い始める) T: (5回目) 最後は (木の役以外も) みんな相手を選びます。 (Tは歌を繰り返して歌い、全員が二人組になって回るようにする。終了してすぐ) 大きな円になって座って目を閉じてね。</p>	<p>(*1) 数名が手を挙げ、指名された女兒 d が歌詞の冒頭を答える。 (*2) しぐさ遊びでこぶしをトントン打ち合せ、「拍打ち」をする。 (*3) 歌声の音量が下がる。Cは互いに聴き合い、拍を保って歌っている。 (*4) Cは広がって手を繋ぎ、歩く方向に体を向ける。 (*5) 円の中の4人は庭のクルミの木。手を繋ぐ。歌の後半は歌の前半はクルミの木の周りを回る。歌の後半は木の役は相手を選んで二人組で回り、選ばれた子の新しい木になる。Tは遊びのルールを確認したのち、遊びを開始する。</p>

表2-5 《活動5》「秋の野原」をテーマにした即興的創作（8分）〔ねらい：4拍の文（言葉）の即興的創作〕

《活動の様子》	《活動の流れ》	《備考》
<p>5.2 </p> <p>(Tの即興した4拍の言葉を、リズムしながら全員でエコーする)</p>	<p>5.1 【森の野原を想像する】 T：目を閉じているかな。(円の真ん中に布を広げる。)(※1) T：目を開けて。ここは秋の野原よ、想像しましょう。Hozs-zsú az erdő, (森は広い) … 「森の歌」を歌いながら、鳥や動物の人形を、野原に見立てた布の上に並べる。)(※2) T：さて、ここに何が見える？ 何が飛んでる？ 何がゴソゴソしてる？ (ゆっくり拍節的に語ると、1文ごとにCが復唱する。)</p>	<p>【森の歌】  (歌詞訳) 森は長い、森は広い。 鳥は陽気に歌う、この森は大きい！ (出典：フォライ、p. 228)</p>
<p>5.4 </p> <p>(C自身が4拍の文を即興する。「誰ができるかな？」に拳手)</p>	<p>5.2 【Tが4拍の文を即興的し、全員でエコーする】 T：(手で言葉のリズムを打ちながら) クマが木苺を摘んでいる。(※3) (Cは一文ずつ、リズム打ちしながら復唱する。)</p>	<p>(※1) Cは口々に「閉じてる、閉じてる。」 (※2) Cはすぐ「森の歌」に唱和する。 (※3) ハリネズミ、青虫についても即興する。 (※4) 数名が拳手。2名が指名されてエコーする。リズムの打ち間違いがあれば直す。 (※5) 開始は「私は見た látok」(2拍) で共通。Cは次々と即興を発表する。必ず全員でエコーする。発表にリズム等の間違いがあればTが示し、Cに正しくエコーさせる。難しいものは全員にエコーさせ、共有する。 (※6) 3拍しかないので、4拍目は休符だと教え、全員にエコーさせ、共有する。 (※7) リズム等の間違いがあれば直す。 (※8) 人形を布にくるんで片付ける。</p>
<p>5.5 </p> <p>(両手でキッツキ人形を待つ)</p>	<p>5.3 【Cが一人で、リズム打ちしながらエコーする(2名)】 T：蝶よ、蝶よ、高く飛べ。だれがこれを「歌える」？(※4)</p> <p>5.4 【Cが4拍の文を即興し、リズム打ちしながら発表する】 T：では今度はみんなの番よ。ここにあるものを見て、または森を想像して考え出してね。誰ができるかな？ C：「きれいなカマキリを見たよ」「狐をあそこで見たよ」(※5) C：「ハリネズミを見たよ」(※6)</p>	<p>(※1) Cは口々に「閉じてる、閉じてる。」 (※2) Cはすぐ「森の歌」に唱和する。 (※3) ハリネズミ、青虫についても即興する。 (※4) 数名が拳手。2名が指名されてエコーする。リズムの打ち間違いがあれば直す。 (※5) 開始は「私は見た látok」(2拍) で共通。Cは次々と即興を発表する。必ず全員でエコーする。発表にリズム等の間違いがあればTが示し、Cに正しくエコーさせる。難しいものは全員にエコーさせ、共有する。 (※6) 3拍しかないので、4拍目は休符だと教え、全員にエコーさせ、共有する。 (※7) リズム等の間違いがあれば直す。 (※8) 人形を布にくるんで片付ける。</p>
<p>5.5 </p> <p>(両手でキッツキ人形を待つ)</p>	<p>5.5 【一人ずつ、手の平でリズムを受け、手拍子でエコーする。】 T：まだたくさん手をたたいていない人のところに行きますよ。(発表していないCに一人ずつ、4拍の文を即興し、キッツキ人形でリズムを手のひらに刻む) 「ここはもう美しい秋」「葉っぱが黄色くなった」「クルミと栗です」「私(キッツキ)はあなたたちのところに来ました」(Cは手拍子でリズムを打ちしながらエコーする)(※7) T：おやすみなさい、よい夢を見てね。(※8)</p>	<p>(※1) Cは口々に「閉じてる、閉じてる。」 (※2) Cはすぐ「森の歌」に唱和する。 (※3) ハリネズミ、青虫についても即興する。 (※4) 数名が拳手。2名が指名されてエコーする。リズムの打ち間違いがあれば直す。 (※5) 開始は「私は見た látok」(2拍) で共通。Cは次々と即興を発表する。必ず全員でエコーする。発表にリズム等の間違いがあればTが示し、Cに正しくエコーさせる。難しいものは全員にエコーさせ、共有する。 (※6) 3拍しかないので、4拍目は休符だと教え、全員にエコーさせ、共有する。 (※7) リズム等の間違いがあれば直す。 (※8) 人形を布にくるんで片付ける。</p>

表2-6 《活動6》「クルミが揺れる」の歌（※《活動2》の歌と同じ）（2分）〔ねらい：歌のリズムを打つ〕

《活動の様子》	《活動の流れ》	《備考》
<p>6.1  (犬の人の形の口がリズムを歌う)</p> <p>6.2  (犬と一緒に一人で歌とリズム)</p>	<p>6.1 【歌を聴いて何の歌か当てる】 T：犬が歌いたいそうよ（歌のリズムに合わせて犬の口を動かしながらハミングする）。〔指名されたCが歌の最後の1行（4拍）を歌って答える。〕</p> <p>6.2 【手でリズム打ちしながら歌う（全員⇒一人で）】 T：立って歌いましょう。犬の口の動きを、気をつけて見てね。 〔G：手でリズムを打って歌う。〕〔*1〕 T：〇〇,一人で。（指名する。）〔C：犬の口を見ながら一人でリズムを手で打って歌う。mo-gyo-roを正しく打てない〕〔*2〕</p> <p>6.3 【手を繋いで輪になって歩く】 T：急いで手を繋いで！ さっきの秋の野原に行けるかしら。（軽快なテンポで歌いだし、時計の反対回りに歩く。）〔C：すぐ大きな声で唱和して拍に合わせて歩く。〕〔2回歌って止まり、円の中を見て驚いたように言う。〕野原に着いたのではなくて…違うものが見えるわ。（グロッキーを取りに行き、旋律を奏で始めると、数名が次々に拳手をする。〕</p>	<p>【この歌の音楽的特徴】 歌詞：4行詩（1行が4拍）、脚韻（2行ずつ） 音階（構成音）：ミ-レ-ド（ド=終始音） 音域：F5-A5（3度） 旋律の動き：順次進行 形式：反復（1行目と2行目） リズム：1・2・4行目が同一リズム。 〔<u>ティテイ ティテイ ティテイ</u> ター〕 3行目の1拍目 <u>mo-gyo-ro</u>のみ、<u>ティ</u> <u>リ</u> <u>テイ</u>と刻む。</p> <p>〔*1〕細かいリズムを手で打てるよう、 速いテンポにする。 〔*2〕このあともう一人指名する。mo-gyo-roリズム（ティテイター）を直して復唱させる。C全員に正しいリズムを犬の口の動きで示す。</p>

表 2-7 《活動 7》 伝承の遊び歌「ビロードのすみれ Bír-sony i-bo-lyács-ka,」で遊ぶ (5分10秒) [ねらい：しぐさ・役交代の遊び]

《活動の様子》	《活動の流れ》	《備考》
 <p>(遊ぶ)</p>	<p>7.1 【楽器 (グロッケン) の旋律奏を聴いて何の歌か当てる】 C1：顔を洗う…、C2：スマイレ…、 T：歌の始まりは？ C3：Bír-sony i-bo-lyács-ka (歌いだすと、他のCも唱和する) T：Bír-sony i-bo-lyács-ka (冒頭からはっきりと歌い出す。) C：(すぐ唱和し、2行目で「遊ぶ」) T：(3行目から遊びのしぐさを伴って歌う。)*2 C：(遊びのしぐさをしながら最後まで自信のある声で歌う。)</p>	 <p>【この歌の音楽的特徴】</p> <p>【出典：フォライ、p.151】</p> <p>歌詞：8行詩 (1行が4拍)、脚韻 (各行) 音階 (構成音)：ラーン、ソーファームーレード (ド = 終始音) 音域：D5-B5 (6度) 旋律の動き：順次進行、3度の跳躍、反復 形式：反復 (1・2行目が同型)</p>
 <p>(髪をとかして)</p>	<p>Bír-sony i-bo-lyács-ka, u-gorjja Du-ná-ba, Tá-maszd meg ol-csál-ad, két a-rany pál-cá-val, Fő-sül-köd-jél, Mo-sa-kod-jál, Va-la-kí-nek kő-té-nyé-be meg is tö-rül-köz-zél.</p> <p>①ビロードのすみれちゃん、 ②ドナウ川に向かって飛び 跳ねなさい。 ③脇を支えなさい、 ④金色の二つの小杖で ⑤髪の毛をといて、 ⑥顔を洗って、 ⑦誰かのエプロンで、 ⑧拭きなさい。</p>	<p>(*1) ハンガリーの2大河川と最大の湖。 (*2) 遊びのしぐさは次の通り。①両手の人差し指で「二つの小杖」を顔の脇に置く。②「小杖」を保つてその場で跳ぶ。③④拍に合わせて体を左右に横に揺らす。⑤手鏡を見ながら髪をとかす。⑥顔を洗う。⑦⑧エプロンに見立てて服をつまみ体を左右に半回転する。内側のスマイレは外側のスマイレを選び、その子のエプロンで顔を拭く。 (*3) このあと4回遊びを続ける。遊びが途切れないようにTは歌の開始を助けて歌う。</p>
 <p>(顔を洗って)</p>	<p>7.2 【歌のしぐさを付けて歌う。しぐさを確認する。】 T：魔法をかけましょう。ここは小さなドナウ川、テイサ川、それともバラトロン湖かも。(*1) もうここにスマイレたちがいるわ。(円の中に4人、導き入れて、遊びの隊形にして) 最後までしぐさをやってみてね。 (*3)</p>	
 <p>(エプロン交換)</p>	<p>7.3 【遊び、最後はハグし合う。】 T：(歌の4回目に) 最後に私たちみんな、誰かを選びますよ。(歌の終わりに) そしてハグしますよ。[C：Tの言葉に促され、それぞれ相手を見つけてハグし合っ て遊ぶ。]</p>	

表 2-8 《活動 8》「海の生き物」をテーマにした即興的創作 (8分) [ねらい：4拍の言葉を即興的に歌う]

《活動の様子》	《活動の流れ》	《備考》
<p>8.1  (絵本を即興する)</p>	<p>8.1 【絵本を即興する (演劇的・音楽的に語る, 節をつけて語る)】 T: 不思議な魔法の海です。♪ Sok-sok fur-csa ten-ge-ni lény. (変な海の生き物がたくさんいるわ)。(ミ・ミ・レ・レ・ド・ド・ド・ド) 等々 (*1) T: この生き物たちは何からできてきているの? [C: 野菜, 野菜] (*2) T: ♪ Ki-hez ki-hez er-kez-tem? (わたしはどこに着いたの?)。[ソ・ソ・ミ・ミ・ソ・ソ・ソ・ソ・ミ] 等々 (*2)</p>	<p>(*1) Tは語りから, 急に歌い語りになる。Cが揃ってエコーで唱和する。Tは, 語りと歌い語りを即興で織り交ぜて読み聞かせていく。Tが歌って語るとCは自然にエコーで唱和する。 (*2) TとCがやり取りしながら絵本を最後まで読み進める。 (*3) 「作りましょう」とは言わない。Cは黙っている。 (*4) 歌にして返すと (ミレドで), Cは口々に布の上にいるものを言う (*5) 「ミ・ミ・レ・レ・ド・ド・ド」で歌う。「お友達のサメ…」と同じ旋律。さすがTがリズムを打ちながらエコーで歌うとCたちがすぐ唱和する。 (*6) C1と同じ旋律で即興する。 (*7) 拳手した数人の子どもが次々, 指名されて創作歌を手拍子のリズム打ちとともに発表する。「ここに…が見える (ミ・ミ・レ・レ・ド・ド・ド)」は共通である。その都度, その子の創作をエコーする。リズムが正しくないとき, Tはリズムを正し, エコーさせる。</p>
<p>8.2  (海について何か言う)  (保育室に戻る。「赤の組, さようなら。」)</p>	<p>8.2 【海について4拍の言葉を即興的に歌う】 T: (布をCの前に広げ, 唱える) Itt van egy nagy ten-ger. (ここに大きな海があります。) 海について何か言います。 (*3) T: (黙っているCに) 目を閉じて! (海の生き物人形を布の上に配置して) ♪ Las-sanki-nyit-hat-od. (ゆっくり目を開けて) [ソ・ミで即興] T: 何がいる? [C: サメ!] ♪ Ba-rát-ságos cá-pa (お友達のサメがいます) (ミ・ミ・レ・レ・ド・ド) (*4) C1: Látok ott egy kis tek-nót. (そこに甲羅が見える) (*5) T: Hát még mit látok? (さて何が見える?) (ソ・ミ・ソ・ソ・ミ) C2: Látok ott egy pi-ci ha-lat. (そこに小さい魚が見える) (*6) C3: Látok ott egy vi-zí-pó-kot. (そこに水グモが見える) (*7) C4: Látok ott egy an-gol-nát. (そこにウナギが見える) T: ここにないものでもいいのよ C5: Látok ott egy bál-nát. (そこにクジラが見える) C6: Látok ott egy cá-pát. (そこにサメが見える) T: 海よ, さようなら。 T: 立って大きな円になりましょう。きょうはとてよよくできました。 ※門をくぐって, クラスごとに, 保育室に戻る。 T: Pi-ros csoport viszont-látás-ra. (赤の組, さようなら) Hát még a na-rancs-sárg-ák. (オレンジの組, さようなら)</p>	

《活動1》は「挨拶の言葉でエコー」(2分5秒)である。ねらいは、拍の保持、4拍のまとまりを感じることで、拍とリズムの概念の区別、強弱の相対的な違いを知ることである。いろいろなルールがすでに定着している。たとえば、拍は「ひざ打ち」、リズムは2本指の「ウサギの耳」にした右手で左手平打ち、というように両者は区別されている。「拍」「リズム」はすでに用語として定着し、「より大きい」「より小さい」という用語を教師が復唱することで音楽的概念の形成が促される。

《活動2》は「伝承の遊び歌『クルミが揺れる Erre csörög a dió』を歌う」(2分)である。ねらいは、4拍の保持であり、この歌の旋律を歌うことは《活動6》の準備である。各活動の教材の音楽的特徴を《備考》欄にまとめた。教材もほとんどが4行詩で、言葉の韻律に優れ、旋律の形式感がある。

《活動3》は「伝承の唱え歌『ジュリ兄 Gyékény Gyákány』を唱える」(3分54秒)である。子どもたちは言葉の韻律に富むこの唱え歌を好み、繰り返し唱え、記憶し、内唱を楽しんで行う。できる子が楽器で一人で拍打ち、リズム打ちに挑戦し、同時に重ねることもできた。

《活動4》は伝承の唱え歌「クルミの木が枯れた」を遊ぶことがねらいである(5分40秒)。クルミ割りのしぐさで拍打ちすることや、連なって歩くことは遊びの際の拍の保持を助けている。

《活動5》は「秋の野原」をテーマにした即興的創作である(8分)。ねらいは4拍の文(言葉)の即興的創作である。4拍は文の最小単位である。創作した言葉のリズムを手で打ちながら行い、即興時に拍とリズムを同時に注意を向けるという総合力を要する課題である。4拍は最も短い文である。伝承の唱え歌、遊び歌を歌い遊ぶ中で、1行(4拍の文としての感覚)の感覚は自然に養われるので、即興の土台はすでに培われている。教師は、創作発表をしなかった子どもに一人ずつ、4拍の文を即興しながらキツツキ人形でリズムを手の平に刻んでやり、子どもは文と手の平に感じたリズムの感覚を記憶して手拍子しながら再生する、という課題を与える。この遊戯的な方法により、モチベーションが高まり、子どもは手の平を差し出してキツツキが来るのを待つ(写真)。

《活動6》は《活動2》で歌った「クルミが揺れる」の歌の、今度はリズム打ちである(2分)。「mo-gyo-ró(ティ・ティ・ター)」のリズムだけが他と異なるリズムであることを、犬の人形を使って遊戯的に気づかせる。

《活動7》は「伝承の遊び歌『ピロードのすみれ Bár-sony i-bo-lyács-ka.』で遊ぶ」(5分10秒)である。しぐさ遊び・役交代の遊びを遊ぶ。歌や唱え歌、そして歌遊びは、具体物を用いないで、想像の世界で遊ぶものである。教師は全般にわたって想像力に訴える言葉かけを頻繁に

行っているが、ここでも「魔法をかける」「スマイルがいるわ」と話す。この遊びはしぐさ遊びと役交代なので、体が十分に触れ合うことがない。そこで、教師は最後に全員が相手を見つけてハグさせ、スキンシップの喜びを味わわせている。

《活動8》は絵本に描かれた「海の生き物」をテーマにした即興的創作である。《活動5》とは異なり、4拍の文（言葉）に節をつけて歌う。初めは教師の即興を復唱することで子どもたちも絵本の即興表現に参加する。そして次に子ども自身が見たもの、想像したものを4拍の言葉を作って歌うのである。

以上見てきたように、どの活動をとっても、ヘルガの音楽指導は「就学のための成熟度」の達成を音楽の側面からさまざまに促そうとするものであると言えるだろう。ヘルガのこの音楽指導には、「学習の基礎となる意図的な注目」、「感覚的思考や表象的思考に並ぶ初歩的な抽象的思考」、「意図的な記憶と想起」（p. 46）を発達させる学習が詰まっているからである。そしてヘルガの音楽指導は「遊び」の原則（幼稚園の最も上位の教育原則, p. 45）が貫かれている。

V. まとめ

音楽教育の「幼小接続」をどう実質的に進めていけばよいかについて、ディートリヒ・ヘルガによる音楽教育の理念と実践は大きな示唆を与えている。幼児の音楽教育は発達の客観的指標をもつべきだろう。「歌を歌ったり、簡単なリズム楽器を使ったりなどする楽しさを味わう」ことで何を発達させるのか。音楽教育が「自分なりに表現」することにとどまってよいのか。幼稚園教育の指針に、音楽的能力の発達が人格の発達に関わるという視点が必須ではないか。「幼小接続」は幼稚園生活の各領域で「就学のための習熟度」を高めることであり、連続的な発達を保障することである。「接続期」の音楽教育において、音楽固有の教育力を知り、実践に生かせる専門性を持った音楽教師がもっと積極的に幼児教育に関わることが望まれる。

注

- 1) 『初等教育資料』「特集Ⅰ 幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の実際」2012年12月号, pp. 1-45.
- 2) 幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方に関する調査研究協力者会議「幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方について（報告）」2010（平成22）年11月, p. 10.
- 3) 池本美香（（株）日本総合研究所）「「乳幼児期の教育・保育制度のありかた—幼児教育の投資効果等について—」（2008年11月11日, 文部科学省, 今後の幼児教育の振興方策に関する研究会）文部科学省ホームページ（2014年6月15日閲覧）。

尾見 敦子

- 4) 昭和女子大学教授, 永岡都氏, 横浜国立大学教授, 小川昌文氏。
- 5) 「フィンランド教育概要 (日本語版)」フィンランド教育文化省のホームページ (2014年6月10日閲覧)。
- 6) フィンランド国家教育委員会のホームページ掲載の英語版より訳出。(2014年6月10日閲覧)
- 7) 「諸外国地域の学校情報」(Copyright (C): The Ministry of Foreign Affairs of Japan)に「幼稚園 (Ovoda - Pre-primary education) : 3歳~義務教育開始」との記述があるが (2014年8月1日閲覧), ブダペストの幼稚園長等に確かめたところ, まだ実現されていない。
- 8) ハンガリー人材省のホームページ掲載のハンガリー語版より訳出。(2014年10月10日閲覧)
- 9) 以下で報告した。尾見敦子・永岡都 (2014) 「コダーイの教育思想とハンガリーの音楽教育実践から21世紀の音楽教育を展望する—第21回国際コダーイ・シンポジウムに参加して」『音楽教育実践ジャーナル』vol. 11, no. 2, pp. 189-200.
- 10) 教師と子どもの会話, および唱え歌, 遊び歌の訳出は筆者が, ビデオ (筆者撮影) からのハンガリー語の聴き取りと書きおこしは, キラーイ・アッティラ氏 (城西国際大学) の助力を得た。表中の楽譜の出典は以下に拠る。Forrai Katalin (1974), *Ének az óvodában*. Editio Musica Budapest.

参考文献

- 尾見敦子・永岡都・小川昌文 (2014) 「音楽教育における『幼小接続』をどう考える—アメリカ・フィンランド・ハンガリーの現状比較から—」『音楽教育学』第44巻, 第2号, pp. 80-84.
- サライ美奈 (2014) 『ハンガリー たっぶり遊び就学を見通す保育』かもがわ出版
- 藤井ニエメラみどり・高橋睦子 (2007) 『安心・平等・社会の育み フィンランドの子育てと保育』明石書店

(本研究はJSPS 科研費 26381225 の助成を受けた。)